

目次

お知らせ p.2

ひろば p.3

会員からのひとこと p.5

後記 p.13

今年も、想定を超える猛暑が続きました。ようやく、新しい季節の訪れを実感できるようになったという安堵感も束の間、次々に台風が発生し、各地に大きな災害をもたらしました。穏やかな自然の恵みが誰にも行き渡る本物の秋を存分に楽しみたいと切に願います。

本日は研究所ニュース Vol.9 をお届けします。前号の発行からずいぶん時が経ってしまいました。この頃届かないのですが…というお問合せをいただき、申しわけなくも、嬉しく思いました。お問い合わせありがとうございました。

「お知らせ」欄には、第10回勉強会のご案内を掲載しました。今回は、これまで研究所の主催で開催してきた「世界の家庭科の今」シリーズの第6回目です。1回目から4回目までのシンガポール、フィリピン、タイ、マレーシアの家庭科教育について、5回目の日本の小学校家庭科の授業実践報告に次いで、韓国の家庭科についてお話しいただきます。韓国の家庭科教育はどのようなものなのでしょうか。11月8日（土）午後4時からの勉強会を楽しみにお待ちしております。

「ひろば」には、「学習指導要領改訂の議論が始まるこの時期に」という雑感を書かせていただきました。そして、みなさんが楽しみにして下さっている「会員からのひとこと」には、「この秋の味覚 一番の楽しみ」というテーマで、会員のみなさまに原稿を寄せていただきました。長い過酷な夏をどうお過ごしだったか、新しい季節を迎えてどんな気持ちでおられるか、一番楽しみな秋の味覚は…をお話しいただきました。お一人おひとりの個性的で心豊かな生活が立ち現れた印象深い頁となりました。寄稿して下さったみなさま、ほんとうにありがとうございました。



本会員のみなさまには、しばらくご無沙汰いたしました。

猛暑を抜け、ようやく過ごしやすい季節となりました。お変わりありませんか。

連続講座“世界の家庭科教育のいま”開催のお知らせです。

これまで開催した、シンガポール、フィリピン、タイ、マレーシア、日本（小学校家庭科の授業実践）に次いで、シリーズ6回目の今回は、韓国の家庭科についてお話しいただきます。

講演は英語で行われますが、日本語訳をつけております。質疑も日本語で行っていただけます。

- ▶ 日時： 2025年11月8日（土）16:00～17:30
- ▶ 場所： オンライン
- ▶ テーマ： 韓国における家庭科教育：課題と改革への道筋
- ▶ 講師： Dr. Nansook Yu
Dept. of Home Economics Education, College of Education, Korea University, South Korea
韓国高麗大学校教育学部家政教育学科教授
韓国家庭科教育学会理事、ARAHE 理事

▶ 要旨：

本講義では、韓国における家庭科教育（HEE）の発展、構造、そしてビジョンを概観し、特に、韓国の家庭科が、職業志向の教科から、批判的かつ持続可能性に基づいた学問へと変遷してきたことに焦点を当てる。1947年の韓国家政学会、そして1989年の韓国家庭科教育学会の設立以来、韓国の家庭科は社会の変化、国家カリキュラム改革、そして世界的な教育論議の影響を受けながら進化し続けてきた。

2022年改訂版ナショナル・カリキュラムにおいて、家庭科は学習者の実践力を伴う知識・能力、環境意識、そして持続可能な生活を送るための能力を育む重要な科目として、改めて位置づけられた。韓国の教員養成プログラムは、教育学の知識（PCK）と家庭科の専門分野の知識（CK）の両方を基盤としており、統合化と問題解決型学習を通じて、将来の教育者が学んだことを授業実践に生かせるように育成する。

最後に、家庭科教育の現代的使命についても触れたい。家庭科教育の現代的使命とは、すなわち、個人、家族が、ウェル・ビーイング、自律、持続可能性を追求し、社会変革にも貢献できるようにエンパワーすることである。本日、韓国の経験を日本の家庭科教育に携わる方々と共有することによって、これまでよりもっと持続可能で人間中心の未来の実現に向けた家庭科教育の役割を再考するための対話や協働が促進されることを願っている。

会員のみなさまには、開催日の数日前に zoom 情報をお知らせします。

参加ご希望の方は、そこに示した URL からお入りください。



Dr. Nansook Yu

Dept. of Home Economics Education, College of Education, Korea University, South Korea

韓国高麗大学校教育学部家政教育学科教授。中学校の家庭科教師としてキャリアをスタートさせた後、2013年から2020年まで韓国国立全南大学校（Chonnam National University）家政教育学科教授、2020年より現職。

研究分野：家庭科カリキュラム、家庭科教授法・学習法、家庭科教師の専門能力開発。

現在、韓国家庭科教育学会編集担当理事、韓国家政学会理事、家庭科教師協会会長、国家カリキュラム検討委員会などを歴任。

「学習指導要領改訂の議論が始まるこの時期に」

工藤 由貴子

昨年の12月25日に文部科学大臣による「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」が発出されました。「社会や経済の先行きに対する不確実性の高まり、これからの我が国を担う子供たちは、激しい変化が止まることのない時代を生きることになる。……生涯にわたって主体的に学び続け、自らの人生を舵取りする力を身につけ、……異なる価値観を持つ多様な他者と当事者意識を持って対話を行い、問題を発見・解決できる「持続可能な社会の創り手」となり、……生成 AI などデジタル技術を活用して全ての子供が多様で豊かな可能性を開花させ、……芸術やスポーツを通じた豊かな心身の育成を含め、多様な個人が幸せや生きがいを感じると同時に、地域や社会全体でも幸せや豊かさを享受できるよう、教育を通じて、調和と協調を重視する日本社会に根差したウェルビーイングの向上を図ることが必要である。」

今を生きる子どもたちへ、そして、子どもたちを育てる教育への大きな期待が込められた、すばらしいグランド・デザインの提示だと思います。この諮問を受けて、中央教育審議会教育課程特別部会において、「質の高い、深い学びの実現、分かりやすく使いやすい学習指導要領の在り方、多様な子どもたちを包摂する柔軟な教育課程の在り方、学習指導要領の趣旨の着実な実現のための方策」等が審議されました。更に、それを受けて各教科のWGが立ち上がり、「生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、自らの人生を舵取りすることができる、民主的で持続可能な社会の創り手をみんなで育む」ために、それぞれの教科における具体的な学びの検討が始められたところです。期待が膨らみます。

およそ10年毎に、次の10年に向かって大きなコンセプトが打ち出されるこの時期は、そこに描かれた大きな理念をどう解釈するかということについて、あれこれと考えを巡らせ、問いが生まれる、とても大切な時間だと思います。

今回の諮問を読んで、まず私の頭に浮かんだ問いは、子どもたちがその創り手となることを期待されている「社会」とはどのようなものなのだろうか、家庭科ではどういう共通理解をしていけばいいのだろうかといったことでした。

人間が地球の回復力を超えた負荷をかけた結果生じた問題を克服し、持続可能性を取り戻そうという潮流の中で、子どもたちが行動しよりよいものへと変革していくのは、人間が関わってつくる「社会」だけではなく、すべての生き物と共に人間もその中にあり、その一部であるような自然共同体と解釈すべきだろうと思います。とすると、これからの時代に家庭科が育てていくのは、人間のつくった社会におけるシチズンシップに留まることなく、自然の共同体におけるシチズンシップ：自然を利用したら、その中にいる一人としてそれが回復される場所まで責任をもつ、修復、手入れ、自然と直接的で身体的な触れ合いをし、道具を使い、自然に働きかける（家庭科の場合には、

それが被服製作や調理実習にあたる)、育成の楽しみを味わう等を伴うものだと思います。自分は別のところにおいて、環境のために何かをしてあげることとは全く異なる考え方です。

生命誌研究者の中村桂子氏は、「地球に優しく」という言葉への違和感について、次のように述べています。「地球に優しくというのは、上の世界にいると思うから言えることです。そうではなく、地球やその中に暮らす生き物たちに優しくしてもらって、お互い優しくし合おうね、そうしないと人間は生きていけないねというのが事実でしょう。」(中村桂子『知の発見』(2015)朝日新聞社)

子どもたちにとって、「持続可能な社会の創り手」となるための第一歩は、自らの頭で、行動で、自分の立ち位置を認識することから始まるのだらうと思います。そのプロセスなしに、環境保全のためにあまりごみは出さないようにする、というような学習へと性急に進んでいかなないことを肝に銘じたいと思いました。家庭科が目指すのは、「持続可能な社会のために」という理由で行動できることではなく、生物として求めていることを正しく感じて、自分はどのような生き方をしたいかを出発点に「よりよい生活」に向かう、それが、結果として、持続可能性をつくることに繋がること。近代社会の生み出した人間、伝統や歴史から切り離された個人から、自然共同体の一員、身近な人やコミュニティを大切にする一人ひとりへと転換させ、そこから持続可能な社会に繋がっていく大きな流れをつくることだと思います。

今回の改定で、家庭科に深く関わる中学校「技術・家庭」の再編、そこに直接影響を与えている「情報教育の充実」についても、子どもたちの視点からその意味するところを考えるとところから始めるべきです。デジタル化の進展に乗り遅れないように、子どもたちの情報活用能力を高める、単に情報を使いこなすための知識やスキルを習得させるような学習を意味しないことは明らかです。また、子どもたちは情報の消費者でもあり、同時に生産者でもあるという視点も欠かせないと思います。では、「情報の進展著しいこの現代社会を生きる、それぞれの発達段階にある子どもたちは、何を知る権利があるか、子どもたちにとって必要不可欠なものは何か」、難しい問いですが、そのことを、具体的な学習内容の検討に入る前に十分議論してみたいと思います。それを経て初めて、社会全体の安全・安心の確保、持続可能性、社会の分断を乗り越え包摂的な社会づくりに寄与し、ウェルビーイングの最大化をはかる、という情報教育の目的が具現化される教科内容がつくられていくと思います。

いよいよ小・中・高等学校を通しての一貫した教科「家庭科」の誕生です！ 家庭科は、これからの時代に更に大きな役割を果たすことは必至です。次の10年に向けて家庭科の本質を読み解く「概念の深読み」、学習指導要領改訂の議論が始まったこの時期だからこそ、じゅうぶん時間をかけて、できるだけ多くの人たちと、他教科の人たちとも、しっかりやっていきたいと思うのです。それが、次の10年の家庭科のエンパワメントに欠かせないことだと思いますし、これまでの家庭科の共通理解をいったんデフォルトし、新しい時代の家庭科に生まれ変わるまたとないチャンスだとも思います。期待は膨らみます。

「会員からのひとこと」欄には、「この秋の味覚 一番の楽しみ」というテーマで原稿を寄せていただきました。お名前のアルファベット順に、肩書なしで、皆様「さん」でご紹介します。

梨の味と、秋の記憶

梶山 曜子さん

私が一年の中でいちばん好きな季節は、秋です。自分が秋に生まれたということもあるし、単純に過ごしやすいからです。夏のように汗をかくこともなければ、冬のように手足がかじかむこともない。空は高く澄んでいて、風も心地よく、木々の色づきもどこか人の気持ちをやさしくしてくれる気がします。

けれど、そんな私にもどうしても好きになれない季節があります。それは春です。多くの人にとって、春は新しい出会いや始まりの季節かもしれませんが、でも私にとっての春は、どちらかといえば「別れ」と「不安」の象徴でした。

私の父は転勤の多い仕事をしており、幼少期は引っ越しと転校の連続でした。多くの場合、新しい土地、新しい学校に通い始めるのは春。春は桜の咲く季節ですし、たいてい人は待ち遠しい季節だと思うのですが、私にとっては、その桜が咲く頃が一番憂鬱に感じられていました。新しい制服、新しいクラス、新しい教室。すでに仲の良い友達同士ができている中に、「知らない人」として一人だけ飛び込むのは、子どもながらにとても勇気が必要でした。

そんな私にとって、秋はある意味で「安心」の季節でした。学校生活にも少し慣れ、友達との距離も縮まりはじめる頃。ようやく「ここにいていいんだ」と思えるようになる。だからこそ、秋の空気やにおいは、私の中で特別な安心感とつながっているのかもしれませんが。

そして、秋といえばもう一つ欠かせないのが「食」です。中でも私が一番好きなのは、梨。とくに「20世紀梨」は、他のどの梨よりも、私の中で深く心に残っている果物です。

もともと生まれは広島でしたが、初めて入学した小学校は東京杉並区の学校でした。2年生になる少し前に広島の小学校に転校することになり、4年生までの3年間、広島市内の小学校に通いました。5年生になる時に鳥取の小学校へと転校しました。立て続けの転校に心が追いつかず、不安と緊張が交錯するなかで迎えた新しい学校。鳥取の小学校は、それまで通っていた東京や広島の小学校に比べてずいぶん規模が小さく、クラスの人数も少なめでした。先生も同級生もあたたかく接してくれたけれど、どこか自分だけが「外」から来た存在のように心細く感じていました。そんな私を、担任の先生は何かと気にかけてくれました。たとえば音楽の時間には、トランペットや小太鼓をすすめてくれ、体育ではミニバスケットボールのチームにも誘ってくれました。さらに、その先生は「都道府県を全部覚えるチャレンジ」をクラスで行い、私も夢中になって覚えました。初めて受けた家庭科の授業もその

担任の先生が教えてくれて、今思うと、私が家庭科を大好きになったのは、その先生の影響だったのかもしれない。

そうやって、クラスにもすっかり馴染んできた5年生の秋に、初めて食べたのが「20世紀梨」でした。それまで私が食べていたのは、どちらかといえばやわらかめの甘みの強い梨でした。ところが、その20世紀梨は一口かじった瞬間、甘みの奥にしっかりとした酸味があって、爽やかでみずみずしく、まさに「シャキッ」と音が聞こえそうな食感。驚くほどおいしくて、ひと口ごとに気持ちまでリフレッシュされるような感覚を今でもはっきりと覚えています。

その日から、私にとって20世紀梨は「鳥取の味」になりました。通学路の風景、教室の匂い、校庭のざらざらとした砂、そして方言まじりの子どもたちの声。すべてが、あの梨の味とともに記憶に残っています。

「この学校で卒業したいな」——そんな希望を持ち始めたころ、再び転校が決まりました。クラスみんながサプライズで開いてくれたお別れ会では、全員が私に手紙を書いてくれました。今思えば、これもきっと担任の先生の温かい計らいだったのでしょう。あのときの気持ちは、今でも忘れられません。

たった1年しかいなかったのに、あの学校は今でも私の中で一番心に残っている小学校です。

今年も秋になり、スーパーの果物売り場にはいろんな種類の梨が並び始めました。幸水、豊水、新高……どれもおいしそうです。でも、私は迷うことなく20世紀梨を手に取ります。

袋を開けると、あのころと同じ香りがふわりと漂い、ひとくちかじれば、鳥取の風景と小学校の記憶がよみがえってきます。梨の味とともにめぐる私の記憶は、今もなお、鮮やかに、そしてやさしく心を包んでくれるのです。

秋の味覚 — 新米 —

河原 佑香さん

秋が来ると、俄然楽しみになるのは「お米」です。

通年食べられるものですが「新米」はこの季節ならでは、瑞々しく、もっちりした新米のごはんを食べると、この上なく幸せな気分になれます。

いつも秋になれば当たり前に入りの新米ですが、今年はお米が手に入らない時期もあったので、先日スーパーに並びはじめたときは心底ホッとしました。

思えば今年の夏は酷暑に加えて豪雨も多く、気候変動の影響を実感する年でもありました。そんな厳しい状況でも変わらずお米づくりをする米農家の方々が、私たちの「当たり前」を作ってくださっているのだと感謝に堪えません。

さて、最近、とある米農家の方が「自然に負担をかけない、二酸化炭素を減らすような農業に変えていきたい」とお話をされていて、ハッとしたことがありました。

石川県の能登半島にある「白米千枚田(しろよねせんまいだ)」の農家の方へのインタビューでした。

「白米千枚田」は、石川県輪島市東部の白米町に位置する棚田です。海に面した珍しい棚田で、農林水産省の「日本の棚田百選」や世界農業遺産「能登の里山里海」にも選ばれています。

1004枚の小さな田んぼが急斜面に連なり、それが海岸線までつづいて気持ちのいい景色が広がっています。

私は輪島市に祖父母が住んでいたもので、会いに行く道すがら千枚田を家族みんなで眺めたりしました。幼い頃の記憶ですが、田んぼの緑と海の青が一面に広がり、深呼吸をするととても清々しかったのを憶えています。

水田の面積は1面あたり平均約20㎡と、だいたい小学校の教室の3分の1ほど。1つ1つが狭く、斜面にあるため、大きな耕運機は入れられません。そのため今も田植えや稲刈りは手作業でおこなわれています。

農家の高齢化や後継者不足により耕作できない田んぼが増えたこともありましたが、地元住民やボランティアの方々の尽力により保全されてきました。

2007年には、「オーナー制度」も始まりました。オーナーがマイ田んぼを持ち、棚田保全や稲作体験に参加できる仕組みで、都市部を中心に多くの申し込みがあるそうです。

多くの人の手によって守られてきた千枚田は、2024年の能登半島地震、その後は夏季の豪雨により甚大な被害を受けました。それでも昨年は約120枚、今年は約250枚の田んぼで田植えがおこなわれ、少しずつ復興が進められています。

そして、この豪雨災害に対し、環境問題に目を向けて「自然に負担をかけない農業を」と語った農家の方の言葉は、消費者の責任について改めて考えるきっかけになりました。

いつか、秋に新米を食べるといった当たり前もなくなってしまうかもしれません。今ある「当たり前」を一緒に守っていくために、一人の消費者として、そして家庭科教育に関わる者として、できることはたくさんあるはず。棚田のように、小さくても一つ一つ、行動を積み重ねていけたらと思います。



今年の中秋の名月は十月六日でした。翌七日が満月ということですから、待宵の月ということになります（風流な呼び方ですよ）。華流ドラマを見ていると重要なシーンでよく中秋節という言葉が出てきて、中国においては重要な節日・節句であることがうかがえます。旧暦八月十五日の満月の日に、月の女神である月姑に収穫物を供える豊穰祈願の祭りが起源だそうです。また、「月圓人團圓（満月は再開をもたらす）」といわれ、家族円満を願って遠く離れた家族も一堂に集まって祝うのだそうです。日本とはずいぶん違うようです。

日本で月見と言えば、ススキを供えて月見団子でしょうか。月見そば、月見酒、月見バーガー・・・月見と名の付く食べ物はいくつかありますが、我が家では中秋の名月の別名である芋名月にちなみ、庭の芋を収穫し芋料理三昧です。芋ご飯、てんぷら、大学芋、味噌汁・・・おやつにもスイートポテト、芋けんぴ、干し芋・・・。どれもおいしいですが、アツアツのふかし芋にバターをのせて食べるのが一番おいしいと思います。若いころは食卓塩をかけて甘みを増していましたが、今は健康のため食卓塩は我慢しています。ちなみに佐賀（九州）ではサツマイモのことを「からいも」と言います。「唐芋」と書きます。佐賀に赴任したころは「からいも???辛いも?絡いも???」と妄想が広がり、言葉の壁が立ちはだかりました。江戸時代に中国から琉球王国を経て薩摩の国に伝わり全国に広まったのだそうです。ジャガイモは江戸時代にオランダの貿易商によってもたらされたのだそうですが、オランダの貿易拠点がジャカルタにあったので「じゃがたらいも」と呼ばれたのが名前の由来だそうです。諸説あるかもしれませんが。江戸時代までは芋と言えば里芋だったそうで、こちらは縄文時代にすでに食されていたそうです。なお、佐賀でもジャガイモはジャガイモ、里芋は里芋です。ジャガイモも、里芋も味噌汁の実の定番ですね。

中秋の名月を愛でたなら一月後の十三夜を愛でるのが昔ながらのしきたりのようです。芋名月に対して栗名月と呼ばれますので、我が家では庭の栗を拾い、栗おこわ、渋皮煮、焼き栗、栗ジャム・・・と、言いたいところですが、こちらは芋ほど収穫ができず、虫食い率も高いので専ら焼き栗にさせていただきます。

私は十五夜の月より十三夜の月の方が好きです。中秋の名月（十五夜）は明るすぎます。満月からやや欠けた十三夜や居待月くらいが、月の模様がとてもきれいに見えるからです。このころの月を超望遠レンズのカメラで覗くと、クレーターの陰影がくっきりと見えます。あのクレーターは標高何千メートルなのだろう？アームストロング船長が着陸した静かの海はあの辺かな？などと月面に思いを巡らせています。月を題材にした曲は星の数ありますが、ファインダーを覗いていると決まって Fly Me to the Moon が頭の中に流れてきます。

なお、我が家ではお供えするのは月見団子ではなく、月餅です。毎年横浜のK正樓（横浜駅のダイヤモンド地下街の大階段の下にある店）から取り寄せます。季節限定の卵黄入り月餅と好みの月餅を取り寄せています。庭の栗はまだ青いですが、研究所ニュースが発行される頃には拾い時になっているかもしれません。食欲の秋、食べすぎには十分気をつけます。



からいもの収穫



月見酒



十三夜月（2012）



K正樓の季節限定仲秋月餅

妻の給油

大日 義晴さん

「給油したい。」

ある晩、妻が前振りなくつぶやいた。あまりにも前振りがなかったので、数十秒のシンキングタイムを要した。

「二郎系ラーメンが食べたい。」

二郎系ラーメンをご存知ない方は、ぜひスマホで画像検索を。豚骨醤油ベースのしょっぱめのスープに、背油のかたまりが雪化粧のように散りばめられ、太くてゴワゴワしたすいとんのような麺が沈んでいる。上には親の仇のような山盛りのモヤシとキャベツ、さらに大量のニンニクとこぶし大のチャーシューが脇を固める。要はとにかくコッテリしたボリュームのあるジャンクなラーメンだ。それをガツンと食し、油分を大量に摂取することを指して、妻は給油と言ったのだ。

“小”であっても、普通の店の大盛りをゆうに超える。これが若い男性を中心に、巷では大変な人気なのだ。近年 YouTube や TikTok を通じて、これに挑む動画がやたら拡散されたこともあり、じわじわと支持者を増やしつつある。意外なことに、若い女性がチャレンジする動画もたくさん存在する。しかし、甘く見ると痛い目を見るのは明らかだ。人よりはよく食べる私でさえ、食べても食べても一向に減らない丼を目の前にして、「いつか食べ終わる時が訪れるのか」と不安にさいなまれたことが何度かある。無事に食べきれたとしても、翌日の晩飯まではもう何も口にしたくなくなるのが常だ。妻の無謀な挑戦を目の前にして、フン、後悔するがよかろうと思った。でも言わなかった。

当日は夫婦で保育園のお迎えに行き、その足でお店に移動した。妻が一人で食すのを1歳の息子といっしょに店の外から見守ることにした。先に父子で帰宅してもよかったのだが、遠目であっても見守りたかった。これは優しさではなくただの好奇心だ。三人で店に向かう道中、妻は何を注文するか反芻しつつ、何度か「給油」とつぶやいた。その言い回しがいたく気に入ったようだ。一方息子はいつもの動線とは異なる思わぬ移動に、終始キョロキョロと困惑していた。息子よ、ママは今から給油するんだってさ。

店に着き、しばし行列に並んだ後で、妻は颯爽と店に乗り込んでいった。少々待った後、いよいよ念願の着丼。残念なことに、店の外からはチラチラと垣間見ることしかできなかったが、時折人と人のあいだからちらりと見えた妻は、いたって真剣に、いたって無表情で、眼前のラーメンをモッモッと口に運んでいた。私が知る限り、あれは妻がこの上なく集中し、心の底から楽しんでいる時にしか見せない表情だ。ちなみに最近になって、息子がアンパンマンを観ている時にまったく同じ表情を見せるようになった。

妻はペロリと完食し満足そうに店から出てきた。苦しいだのもう食べられないだのとは一切言わず、フン、可愛げがないぜと思った。

帰り道、大量のニンニクと油を摂取した妻の吐く息は、彼女と出会って以来もっともクサかった。率直にそう伝えようと、妻は顔を近づけ、フハーッと息を吹きかけてきた。私をクサがらせるのは大変愉快とのことだった。強烈なニンニク臭をもって、百年の恋が覚めることはなかったが、それは私だけだったようだ。帰宅後、いつものママの匂いと異なることに危機を感じたのか、息子は夜中に何度も目を覚まして、ウーンと泣いていた。

妻は10日と開けずに同じ店に再訪した。妻の給油はつづく。

今年ほど、夏の終わりを待ち望んだことはなかったのですが、店頭にはシャインマスカットが並ぶころ、必ず思い出す出来事があります。それは当時中学1年生の長女と当時小学5年生の次女が、2017年2学期の始業式から、学校へ行けなくなったのです。

次女は、すぐに昼夜逆転生活となり、食事も満身に摂らず、みるみる痩せていきました。とにかく何でもいいから口に入れてほしいと、毎日好物のシャインマスカットを買っては部屋の前に置いて、食べてくれるのを待ちました。部屋のドアには、「入るな」と大きく殴り書きされた紙が貼られ、現実には起きていないこととは思えず、その後、親子で相談機関や医療機関を訪ねましたが、結局教室へ戻ることはできませんでした。それでも週に1度、スクールカウンセラーの先生と一緒に給食を食べられるようになり、ようやく心の安全基地ができたようで安心したことを覚えています。

長女にとっての心の安全基地は部活でした。夕方になると制服を着て、コーラス部の練習だけ参加することから始め、別室登校や校外学習のスキー合宿、修学旅行へと少しずつ参加の機会を増やしていきました。中学では毎年秋に合唱祭が行われていたのですが、1年次の合唱祭では、長女は練習に参加することや、会場へ行くことすらできませんでした。2年次の合唱祭は、会場で見学することができました。3年次の合唱祭は、修学旅行でクラスになじむことができたせいか、練習から参加することができ、3オクターブからなる美声で、クラスメートのみならず、先生方からも褒められ、自信をつけることができたようです。

現在、私は公立中学の別室登校のクラスで見守りボランティアをしています。食べるのが大好きな次女は、毎朝お弁当を作って予備校へ通い、歌うことが大好きな長女は、大学で心理学を学びながら、地元のコーラスサークルに所属しています。私と長女は、この秋、ベートーベン作曲「歓喜の歌」の合唱に参加することにしました。「歓喜の歌」は、聴力を失ったベートーベンが、亡くなる3年前の1824年に作曲した交響曲第9番第4楽章の合唱曲です。「人類みな兄弟」という歌詞があり、自由と平等と平和を求める讃歌です。

私の友人のお父様は、晩年認知症になられてからも、この曲を繰り返し聴いていたそうです。理由は、1943年に行われた学徒出陣の壮行会で歌ったからだそうです。19世紀に作曲され、20世紀、21世紀と、200年も歌い継がれているにも関わらず、世界のどこかで紛争や殺戮が続いていることは悲しいことです。ドイツ語の歌詞に苦勞しながらも、長女はソプラノ、私はアルトで、ささやかながら世界の平和を祈りたいと思います。

「秋の味覚」というお題を頂戴して、懐かしいフルーツケーキの思い出について書かせて頂きます。今では一年を通じて様々な果物が店頭には並んでおり、果物の季節感も薄らいで来ましたが、私にはプラムケーキが「秋の味覚」として定着しています。

学生時代にドイツに留学した時のこと、初めて指導教授の御宅に招いて頂き、ご家族とお茶の時間を過ごしました。香り高いプラムケーキを頂きつつ、爽やかな風が巡る庭を眺めていると、極まっていた緊張感がいつしか解れ、和んでいきました。硬いスポンジ台の上に甘く熟れたプラムをぎっしりと並べて焼いた「Pflaumen Kuchen プラムケーキ」は、長方形にカットし、たっぷりのホイップクリームを添えて頂きます。シンプルなケーキではありますが、甘酸っぱくも濃厚な味わいに魅了されました。教授が「秋には何といてもこのケーキだね」と語られたことがとても印象的で、今でもプラムの爽やかな香りに誘われて数十年前の記憶が鮮やかに蘇ります。

ところで、プラムは夏のフルーツとされており、「スモモ」と翻訳されますが、日本と西洋では異なったフルーツ（品種）を指すようです。ドイツのプラム（Pflaumen）は、日本では「プルーン」の名称でも知られる西洋スモモで、きれいな紫色をしています。ドイツでは夏の終わり頃から9月にかけて店頭には並びます。一方、日本スモモは、初夏から真夏に収穫される赤や紅、オレンジの色鮮やかな丸い果実です。日本スモモには沢山の種類があり、300を超えるとも言われます。大石早生（おおいしわせ）、ソルダム、貴陽、秋姫など、私には今もってきちんと銘柄の区別がつかないのですが、日本スモモは何れも生で皮ごと頂くのが一番と思います。

今年の9月初旬に、秋景色となったミュンヘンに出張しました。知人宅を訪れた際に、「このケーキの季節になったわね！」と言ってプラムで覆い尽くされた懐かしいケーキを切り分けてくれたのでした。勿論、たっぷりと甘くないホイップクリームを添えて…。ひと足先に涼しくなったドイツで「秋の味覚」を堪能させて頂きました。実は、恥ずかしながら私自身はプラムケーキを焼いた経験がないのですが、定年後にやりたい事の上位に「プラムケーキ作りに熟達する」がランキングしています。皆さまにとっての「秋の味覚」とは何でしょう？長く続いた酷暑を乗り越え、この秋一番の味覚をどうか存分に楽しめます様に。

今号も、たくさんの会員のみなさんに参加していただきました。原稿を待つ間、読ませていただく時の愉しみ、このNEWSをつくっている一番の喜びです。ありがとうございました。

2025年も残すところ2か月となりました。

家庭科教育研究所では設立以来継続して、和洋女子大学出身の家庭教員となられた大先輩に、和洋女子大学での学び、家庭科教員になってからの生活、授業内容、児童生徒たちや地域の様子などについてのヒアリングをしてきました。それらの内容を中心軸に、家庭科教育をつくってきた立場の先生方のお話をもう1つの側面から捉え、日本の家庭科教育の歴史を構造的に把握することを目指しています。3月初めには、その調査の一環で、日本の家庭科教育を先導されてきた先生方のヒアリングを行いました。貴重なお話をたくさんうかがっています。まとめてみなさんと共有できるように進めていきます。

4月には研究室の引っ越しがありました。学内移動でしたが、PC、書類、蔵書一切を運ぶ大仕事、たくさんの方にお世話になりました。

そして、8月には、フィリピンのマニラで開催されたアジア地区家政学会（ARAHE）に参加し、“Examining the Impact of Networking Activities on Empowering Home Economics and Educators” というテーマでポスター発表をしました。研究所の設立以来の活動が会員同士のコミュニケーションにどのように影響を与えたか、ひいては、家庭科にどのようなインパクトをもつかを検討しました。この3年間の活動を基にした予備研究の段階に留まっている内容ではありますが、今後も継続的に進めていきたいと思っています。

とても気が早いですが、

Merry Christmas & Happy New Year!

（編集 工藤由貴子）

